

ドイツ第二帝政期におけるフットボールの受容と暴力 -エリアスの暴力論からの再構成-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2020-11-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 釜崎, 太 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/21232

ドイツ第二帝政期におけるフットボールの受容と暴力 — エリアスの暴力論からの再構成 —

釜 崎 太

はじめに

社会を規定する根本的な要因をハビトゥスに求めるエリアスは、主著である『文明化の過程』（1939年）と『スポーツと文明化』（1986年）において、イギリス人の文明化とスポーツの発生をパラレルに捉えている。しかしながら、その数年後に刊行された『ドイツ人論』（1989年）においては、ナチズムの暴力が「文明化の挫折」として問われている。文明化を自らの自然的特質と考えていたヨーロッパ人の多くが「ヨーロッパでは起こりえない」と思っていたことが起こりえたのはなぜなのか（エリアス、1996、360）。

エリアスによれば、ユダヤ人の大量虐殺は合理的な目的のために行使されたものではない。暴力の行使によってドイツの領土が増えるわけでも、国民社会主義者の政治力が増すわけでもなく、プロパガンダの価値も絶滅の最終方針が確定された1942年にはむしろマイナスであった（エリアス、1996、361-362、365）。エリアスは、ユダヤ人に対する異常に激しい暴力は、「服従の快感」を別の方向で補う「攻撃の快感」にもとづくものであったという。例えば、そのほとんどが下層階級の出身者であった看守たちは、収容所の看守になってはじめて他人を足蹴にできるようになると、自分の上司に服従し、期待されている盲従を囚人にも強要したというのである。それゆえ、「ごくわずかな自主性やちょっとした反抗心の気配でもあれば、彼らは暴力

で抑えこまねばならなかった」(エリアス, 1996, 451)。エリアスは、次のような囚人の証言を引用している。

収容所へ移送される間に囚人たちは絶えまなく虐待された。虐待のやり方はそれぞれの親衛隊員の思いつきしだいだった。(中略)肉体的虐待は蹴ったり、鞭で打ったり、顔を殴ったり、発砲して負傷させたり、銃剣で傷つけたりした。移送の間、それを何度も繰り返して、囚人を完全に参らせてしまおうとした(エリアス, 1996, 449)。

この野蛮な暴力、すなわち「文明化の挫折」をもたらしたハビトゥスとドイツの身体文化の関係を考えるために、以下では、釜崎が公表してきたドイツの身体文化に関する諸研究を、エリアスの暴力論の視点から再構成したい¹⁾。

1 イギリスのスポーツと暴力

1-1 文明化とスポーツ化

「文明化の過程」は「外的強制」から「自己抑制」への変化によって特徴づけられる。エリアスは、その自己抑制をもたらしたヨーロッパ人のハビトゥスの変化を、感情や暴力をさらけ出す「戦士貴族」から、それらを自己抑制しようとする「宮廷貴族」への変化に代表させ、その過程を「相互依存の編み合わせ (Verflechtungen)」という概念によって説明している。

戦士貴族は、封建領主の支配する領地で暮らし、自らの田畑の収穫物で生計を立てていた。それゆえ、戦士貴族にとっては敵と味方が明確に区分され、外部の敵との関係、内部の味方との関係のいずれにおいても自己抑制の必要性は小さかった。相互依存しながら生きている人々の数が少なく、編み合わせが短く単純だったのである。ところが、宮廷社会ではその編み合わせが細

分化し、長く複雑になる。領土を奪った領主に多量の物資やチャンスが集積し、それを求めて多くの人々が集まり、機能を分担しながら宮廷が運営されるからである。エリアスは、次のように指摘する。

お互いに絶えず行動をかみ合わせながら生活している人間の列がずらりと並んでいるので、戦士といえどもこの編み合わせのなかに入り込めば、絶えず気を遣ったり、長期的視野を持ったり、行動をより厳しく規制したり（中略）感情をより強く抑制したり、衝動の状態を変えることを余儀なくされる（エリアス、1978、378）。

この「編み合わせ」からの圧力こそが自己抑制を発生させたのである。エリアスは、その変化を経験するなかで、「肉体的暴力があまりない娯楽活動」が求められるようになり、スポーツが受け入れられる下地が形成されたという（エリアス、1995、219）。この暴力を規則によって制御することで「スポーツでないもの」がスポーツになっていく「スポーツ化（sportization）」の典型例を、エリアスは18世紀の狐狩りに見出している。「この種の狩猟独特の性格を研究すれば、われわれは『スポーツ』という言葉が意味していたことをもっともよく理解できる」（エリアス、1995、232）というのである²⁾。

狐狩りが生まれる以前の狩猟は、①狐以外の動物でも追いかけ、ごちそうをもって帰るために狩をする、②動物を捕まえて殺す興奮は、戦争のときにひとを殺すことに関連する興奮に等しいものを平和時に味わう、③戦争と狩猟の両方の目的のために、最もふさわしい武器が使用される、という特徴を有していた。つまり、より単純で、厳密な規制のない狩猟だったのである。これに対して、18世紀に生まれた狐狩りは、①狐と猟犬の競争であり、猟犬をめぐる狩猟家の競争でもあった。②偶然出くわした狐以外の動物の狩猟をやめた。③いかなる武器も使わず、④捕らえられた動物を人間が殺すことが禁じられた。つまり、狩猟家が自分自身と猟犬に、特殊な制約、すなわち

抑制を課したのである。エアラスは、それらの抑制の理由を理解できない外国人の見物客にとって、狐狩りは不思議なものであり、イギリス人の紳士自身でさえ、その習慣をうまく説明できなかったという。

しかし、それらの抑制は文明化された紳士たちの感受性にうまく合致していた。例えば、エアラスは次のような当時の狩猟家の言葉を引用している。

なんて素晴らしいんだ。1時間15分にも及ぶこの愉快的競争で狐が見せてくれた楽しみは（エアラス、1995、232）。

猟犬をよく知っていて、時々、猟犬の手助けができるような人々はスポーツをもっと面白いとおもうし、自分たち自身はその日の成功に貢献していると考えて満足するのである。（中略）それはつまり、それに参加しながらまったく後悔しない楽しみである。（中略）（他の娯楽にない感激があるのは：釜崎注）一種の戦争だからです。その不確かさ、倦怠感、難しさ、危険がそれを、他のどの娯楽よりも面白くさせるのです（エアラス、1995、237-238）。

エアラスによれば、これらの言葉はいくつかの点で「スポーツ化」の核心を突いている。①「狩りをする紳士が綿密で、自ら課した抑制の規律に従う」ことで、「狩猟の楽しみの一部は視覚的な楽しみ」になっている。②人間の楽しみだけのために狐を捕まえて殺すことは受け入れられないと感じている人々が増え、それが主張された。③「暴力を行使する際に得られる快楽を暴力が行使されるのを見る際に得られる快楽」に置き換え、④それにとともに生じる良心の形成とも結合し、「暴力の行使に対する人々の嫌悪が進歩」し、暴力が「廃止されるのを見たがっている」。⑤「後悔しない」で「闘争の興奮を楽しむような方法」（興奮と快楽）で競技されている（エアラス、1995、235-236。強調釜崎）。

つまり、動物を殺し味わう楽しみから、獲物を捕まえる楽しみへ、そして模擬戦の緊張を楽しむものへと変化したのである。そのために、すべてのルールが「狩猟をあまり簡単にしないように、競技を長引かせるように、勝利をしばらく延期するように考案された」（エリアス、1995、241）のである。この狐狩りのルールに、エリアスは「十分な楽しい緊張と戦いの興奮を与える」（エリアス、1955、243）というスポーツの本質を見出している。「フットボールなどの他の種類のスポーツは、参加者がすべて人間である場合に、その問題がいかに関解決されるかを示している」（エリアス、1995、252）といわれるように、この狐狩りに見られる「楽しい緊張」と「戦いの興奮」は、参加者が人間である場合のスポーツにも拡張されていくのである。

この「楽しい緊張」と「戦いの興奮」をもたらすスポーツの競争の近代的な意味は、競争を直接的に相手を傷つけることのない「闘争の一形式」と捉えたジンメル競争論を参照するとき、よりよく理解できる。ジンメルによれば、攻撃的／防御的であった闘争が、近代社会では「第三者をめぐって争う競争というより複雑な現象」に変化し、その競争が多くの人々を魅了することで「とてつもない社会化の作用」（Simmel, 1903, 1012; 釜崎, 2019, 141）を獲得したのである。業績を持続的に比較する競争の興奮が多くの人々を駆り立て、人々の相互交流に「親密さの強度」を獲得させるのである。例えば、商人は自らの商品を売るために、他の商人と競争するが、他の商人に勝利しただけでは自らの目的を達成したことにはならない。顧客という第三者が自らの商品に対して好意をもってはじめて、自らの商品を売ることができる。それと同じように、スポーツの競争も、選手たちが自らの業績を競い合うだけでなく、それを観ている人々という第三者の好意とも密接に結びついている。つまり、「楽しい緊張」と「戦いの興奮」をもたらすスポーツの競争は、選手と選手、選手と指導者の関係を親密なものにするだけでなく、選手・指導者と観衆をも強く結びつけるのである。それゆえにこそ、スポーツは大衆社会への強い影響力を獲得することになったのである。

このジンメル「第三者の行為をめぐる競争」という視点から見れば、エリアスが狐狩りに見出していたもうひとつの重要なスポーツ化の特徴は、それが競争を「視覚的な楽しみ」にしたという点にある。狐狩りは「暴力の行使の快楽」を「暴力を見る快楽」へと変化させ、それを「視覚的に「見せる」競争として形式化したのである。同じことはフットボールにも当てはまる。町から町へとボールを運び込む祝祭としておこなわれた民衆のフットボールが、パブリック・スクールのグラウンドでおこなわれることで、特定の空間に限定され、「視覚的に「見せる」文化へと変化し、「第三者の好意をめぐる競争」としての影響力を獲得しうるように形式化されたのである。

1-2 フットボールのスポーツ化

14世紀以降の民衆のフットボールは、極めて暴力的なものであった。祝祭としておこなわれるゲームは、人数も一定せず、ボールを町から町、教区から教区へと運ぶのを阻止するために互いに倒し合い、殴り合い、骨折はもちろんのこと、ときには命を落とすことさえあった。そのため1314年から1667年の間に国王や市当局から13回以上もの禁止令が出されている。それにもかかわらず、フットボールは多くの民衆を魅了し続けた。

エリアスによれば、19世紀に民衆のフットボールがスポーツ化した背景には、第一に、民衆フットボールの支持者であった土地所有階層ジェントルマンが新興ブルジョアの上昇を前に、自らの階層的なディスタンクション(差異化)を企てその支持をやめたこと、第二には、警察隊(1829年)が禁止を執行する力をもったこと、すなわち国家による「暴力の独占」があった。

パブリック・スクールで改良されたフットボールがおこなわれはじめたのは、1830年頃のことである。例えば、新興のラグビー校では、下層階級と区別される振る舞いを教育するために、「紳士のゲーム」としてフットボールが導入され、1845年にルールが成文化されている。そのルールによって、暴力は厳しく排除され、争いごとはキャプテン同士が話し合って裁定するよ

うに定められたのである。

エリアスによれば、この時期のイギリスにおいて、暴力の抑制をともなうスポーツ化が生じた背景には、スポーツを担ったジェントリー階級のハビトゥスと権力構造の変化があった。17世紀のイギリスは激しい「暴力の時代」であった。1641年にチャールズ一世が反対派を処刑し、1649年にはそのチャールズ一世を清教徒クロムウェルが処刑している。相手に不信をもつようになった各集団は、相手に殺されるのではないかと疑心暗鬼になり、その前に相手を殺すという悪循環に陥っていく（エリアス、1995、38）。18世紀初頭までは、富裕な貴族中心のホイッグ党と小さい土地しか所有しないジェントリー中心のトーリー党は、互いに政権による報復を恐れていたのである。

しかし、同じ土地所有階級をメンバーにしていた両党は、ハノーヴァー王家が定着し、非国教徒に政府を打倒する力がなくなると、両党を分裂させる問題を失い、異なる政治原理でのみ争い合うだけの関係へと変化する。はじめて「非暴力的な競争」が開始されたのである。つまり「政権を取っても前政権を辱めず、競争で敗れば政権を穏やかに政敵に譲り渡す」というハビトゥスの発生である。エリアスは、「剣を使わないで、議論の力、説得の技術、妥協の技術によって戦い」、「妥協の状態で解決」するこのような技法は「高度なレベルの自己抑制」を要求したという（エリアス、1995、45-49）。

その高度な自己抑制をともなうハビトゥスの現れが、国家レベルでの独特の意思決定方法を変化させ、「議会主義化」が生まれると同時に、余暇のあり方を変化させ、スポーツ化を導くことになった、というのがエリアスの見方なのである（エリアス、1995、48）³⁾。フランスでは、文明化のハビトゥスは宮廷化した貴族に担われたが、イギリスでは先の権力構造の変化によって土地所有階級が担うことになる。その土地所有階級が領地での田舎の生活と議会開催時のロンドンでの生活を両立させていたために、スポーツを領地で楽しみ、変形させることができたのであり、スポーツを各地へと普及させる

ことにもつながったのである。

しかし、その一方でエリアスは、スポーツの特徴が「暴力の存在」にあることも指摘している。つまり、スポーツにおける暴力の抑制は「危険さ」と「退屈さ」のディレンマを抱えており、スポーツは「興奮なき社会における興奮の探求」(エリアス, 1995, 57-58) という側面も有しているのである。

自己抑制が厳しくなり生活が安定するほど、この「飛び地(暴力が存在する非日常のスポーツ)」での「興奮」への要求は増していく。すると今度は、文明化し暴力を統制したスポーツのなかに新しい暴力が生まれる。金銭や地域の名誉のためにプレーする労働者階級出身の選手たちの出現から、国際的規模での大会が形成されはじめると、①勝利のために見破られない手段、あるいは罰せられても勝利できる手段として、②真剣にトレーニングをし、プレーに励むがゆえに、③感情抑制のコントロールされた脱コントロール化のゆえに、新しい暴力がスポーツのなかに芽生えることになるのである。

1.3 フーリガンの発生

「感情抑制のコントロールされた脱コントロール化」の典型がフーリガンである。イギリスにおけるフーリガンの発生は、労働者階級のハビトゥスと大きく関係していた。エリアスは、労働者階級が生み出す暴力には関心を示さなかったが、彼の弟子であり、労働者階級の出身でサッカーの経験者でもあったダニングが『フットボール・フーリガニズムの起源』(1988年)を著している。

1960年代にはじまったとされているフーリガニズムは、一般的には、サッチャー政権のもとでの経済不況によって労働者階級のフラストレーションが爆発したものと解釈されている。しかしダニングによれば、観客の暴力はすでにプロ化がはじまる1870～80年代の時期に現れ(第一期)、その後、途切れることなく続き、両大戦間に著しく減少するが(第二期)、戦後の1950年代から増加に転じ、60年代後半から急激にエスカレートしてフーリ

ガン問題へと発展したのである（第三期）。

ダニングによれば、第一期にはすでに多種多様な観客の暴力が見られたものの、その報道はごく控えめなものであった。それは労働者群衆の暴力は予測されたものとして、「とりたてて警告すべきこと」とはみなされなかったからである。今日よりも暴力に対して「社会はより寛容」で、サッカー場での暴力は「重大な問題」とはみなされなかったのである。ダニングはこの暴力の担い手を「よりラフな労働者階級」と表現している。彼らは自らの仕事が肉体的な強さに依存し、「たくましさ」としての「男らしさ」の観念を発達させていた。母親のいる家庭から早い時期に男同士のストリートへと出ていき、暴力に満ちた男の領域でその観念を獲得したのである。

第二期になると、観客の暴力自体が極めて低い水準に抑えられるようになる。当時の新聞などでは「観客の秩序と抑制は驚くべきもの」で、サッカー場は「比較的安全な場所」と報道されていたという。ダニングによれば、これは社会秩序に同化し、文明化した振る舞いをする労働者階級の人々が増えたことに由来している。第一次大戦とロシア革命の経験から、労使関係においても資本側は「妥協と取り込み」という協調方針に転換し、労働者の側も1926年のゼネストの敗北後、階級関係を「対立」ではなく「協調」に見出した。その結果、男性的な肉体文化をもった労働者は減少していった。

ところが、第三期になると、そうした状況が劇的に変化する。文明化がさらに進み、暴力への感受性が高まって、人々は減少していた暴力により大きく反応するようになったのである。以前は問題にならなかった暴動も過剰に報道され、暴力に魅力を感じる人々がサッカー場に集まるようになる。ダニングは、この「認知と現実の相互エスカレーション過程」（ダニング、1988、133-135）こそがフリーガニズムを拡大させたというのである。

ダニングは、これらの新聞報道の変化には、いくつかの要因があったと指摘する。第一に、労働者階級の一部が文明化され、暴力への感受性を高めた社会にとって、少数の激化した暴力が恐怖すべき現象と感じられたことであ

る。第二に、観客の減少を背景にサッカー連盟による暴力取締りのキャンペーンが展開されたことである。このキャンペーンによって見えなかった暴力が可視化され、さらに観客が減少していったというのである(ダニング, 1988, 137-148)。サッカーにおける暴力を記事にすると新聞や雑誌の販売部数が増えるため、マスコミがセンセーショナルな記事を書き、それによってフーリガンが問題視されるようになる。すると「メディアに表彰される名声」のために、テレビ中継に映るテラス(伝統的な立見席)で集中して暴れるという悪循環が生まれる(ダニング, 1988, 148-154)。つまり、暴力が問題視され、報道されるようになると、若者自身にとって暴力が自己実現の意味を帯びたものになったのである。

文明化が労働者の多くに浸透し、リスベクタブルな振る舞いを身につけると、彼らは暴力を放棄して、学校や仕事に意味を見出し、そうしない人々と自らを差異化するようになる。逆に、少数者になったよりラフな労働者たちは、学校や仕事を馬鹿にし、暴力を守ることで自分たちを差異化して、意味を確保しようとするのである(ダニング, 1988, 228-229)。

このようなダニングの指摘を捉えて、奥村は「暴力に意味を与えるのも文明化」(奥村, 2001, 205-206)であったと指摘している。奥村によれば、労働者階級の家庭に育ったダニングとは逆に、裕福な家庭に生まれ、教養を身につけたアカデミシヤンのエリアスにとって、労働者階級の暴力は縁遠い問題であった。それゆえエリアスは、ダニングが取り上げたようなフーリガンの問題に関心を示さなかったのである。奥村がいうように、エリアスにとって重要だったのは、労働者階級という文明化の外部にいる「他者の暴力」ではなく、「ゲーテやシラーやカント」を愛し、「文明化された私」が振るう可能性があった暴力なのであり、自らの両親を殺害したナチの暴力だったのである(奥村, 2001, 208-209)。以下に見るように、ドイツ第二帝政期のフットボールの受容において主役になったのも、労働者ではなく、伝統的な教養市民と振興の経済市民であった。しかしドイツにおいては、イギリスのよう

な暴力を抑制するスポーツは育たず、競争のない体操が教養市民の文化として開花していた。そこにイギリスからスポーツが伝わることで、体操とスポーツの文化摩擦が生じることになったのである。

2 ドイツ体操と学友会

2-1 第二帝政成立以前の体操クラブと学友会

19世紀初頭のギムナジウムでは、体操クラブと学友会がともに「ドイツ統一」を目標に掲げ、下級生が上級生に反抗できない不平等の伝統を覆すべく民主化に努めていた。例えば、ドイツ体操（Turnen）の礎を築いたヤーンは、あからさまな軍事教練を拒否し、各人が気に入ったやり方で体操を実践すべきであると公言していた。その理念にかなっていたのが、個人の自由意志で楽しまれる遊戯であった。宮廷内でおこなわれていたギムナステークに身体訓練の意義を看取していたヤーンは、ベルリン郊外に大規模な屋外体操施設を建設したが、その活動の中心には「徒歩旅行」とともに「遊戯」が位置づけられていた。

ヤーンはその施設の生徒たちとはじめての徒歩旅行と遊戯を企てた。そこから「ドイツ体操」が発生したのである。彼は、町の門前で生徒たちの希望によっておこなわれていたクラス間の殴り合いと取っ組み合いを統率したといわれている。彼は、その生徒たちの習慣を、水曜日と土曜日の午後町門前へと引っ張り出した。そこで殴り合いをするためである。しだいに、彼は生徒たちとともに出かけ、彼らはそこで殴り合いをやめるのではなく、彼らの激しい行動意欲を違うやり方で満足させるように変化していった。ヤーンは（中略）少年たちの行動意欲を秩序づけられた道筋へと導き、そこから遊戯が生まれることを理解したのである（Widt, 1931, 10）。

つまり、ヤーンは生徒たちの殴り合いを統率するために、水曜日と土曜日の「午後の遊戯の時間」を開設したのである。エリアスは、「初期の学友会の多くの学生がこういう体操を好んだのは、それが一定の形式に強制的にはめこもうとせず、全員が平等で各人が自由にやれたから」(エリアス, 1996, 105) であったと指摘している。

遊戯を含むドイツ体操は、ヤーンの弟子たちによってドイツ各地へと広められる。その過程においてドレスデンの体操教師であったクロスが「ドイツ・フットボール (Das deutsche Fußball)」という遊戯を発明している。「20～40人くらいの遊戯者たちが伸ばした手をつないで円陣を作り、その中央から1～2人がボールを足で転がして円陣の外側に蹴り出そうと試みる」(Kloss, 1887, 353-354) ものである。しかしそれは、ごく限られた地域で実践されたローカルな遊戯にとどまった (Naul, 1986, 15-16)。その大きな理由は闘争的な要素に欠けていたからである。闘争的な要素を欠いた遊戯は体操家たちを魅了できなかったのである。

多くの体操家たちに好まれた遊戯は、「戦争遊戯」とも呼ばれる「役割遊戯」であった。役割遊戯は、ティルジットの和平によってプロイセン軍の増員が42,000人に制限されたという国家情勢を背景に、予備軍の準備組織(テロの訓練)としての役割を担うものであった。例えば、体操家たちに好んで実践された「盗賊と市民(盗賊と旅人、騎士と市民)」は、ふたつの組(チーム)がそれぞれ前哨を立て、哨戒部隊を送り出し、伏兵を配して互いに攻撃をしかけるものである。同じように人気のあった「黒い男」では、敵(ナポレオン)を欺く体操家(黒い男)が敵の目をかいくぐり、敵の陣地を目指す。ヤーンは武器をもつての「決闘」を、役割遊戯のなかで、形式化された「素手の格闘技」に変えたのである。闘争的な要素に核心をもつような野蛮な遊戯は、エリアスの言葉でいえば、「攻撃欲求のコントロール」へのひとつの転換点であった。イギリスのスポーツのようにルールによる「暴力の自己抑制」こそ貫徹されなかったが、ヤーンのドイツ体操も「コン

トロール」という意味では「進歩的」な側面をもっていたのである (Hopf, 1998, 59)。

闘争的な遊戯は、徒歩旅行の際に好んで実践された。それは他の体操クラブとの親密性を高め、彼らの国民的記憶の形成に役立ったが (釜崎, 2011)、あからさまな軍事教練を忌避していたヤーンは、系統だった訓練の規範を提示していたわけではない。体操家たちは集団的な遊戯のなかで自ら進んで危険な冒険劇を実践したのである。

しかし、1871年の第二帝政の成立による祖国統一が、体操クラブに決定的な転換点をもたらした。「中産階級一般の期待にはほとんど応えない仕方」で集団の社会的目標が実現されたからである。彼らの祖国統一という社会的目標は、貴族集団に対する市民階級の勝利によってではなく、「いわば彼らの社会的な敵からの贈り物」として実現したのである (エリアス, 1996, 107)。こうして体操クラブには根本的な方向転換が余儀なくされる。彼らは戦士貴族の基準や目標に接近し、体操クラブではあからさまな軍事訓練が課され、体操クラブと同じように市民階級の子弟によって担われていた学友会では「儀礼決闘」が課されるようになったのである。

学友会では、戦士貴族の伝統的な名誉回復のための決闘 (Duell) が、会員がおこなうべき儀礼決闘 (Mensur) として義務づけられた。伝統的な決闘は抜き身で闘うが、ピストルの場合は命中率の低いものを使用して互いに一発だけ打ち合うものであった。名誉回復のために、侮辱された相手に自ら申し込み、申し込まれた側には決闘を受ける義務 (貴族の「名誉」) があった。これに対して儀礼決闘は、武器を手にして傷つけ合うにしても、攻撃は顔・耳・頭だけに限定され、お互いの団体の幹部が対戦相手を決める。この儀礼決闘によって、その勇気と名誉を重んずる学友会は、軍隊に劣らない社会的地位へと上昇したのである (エリアス, 1996, 109)。学友会では「強さが善で、弱さは悪であること」も日常的な経験であり (エリアス, 1996, 140)、「団員の弱さを見るだけでも (中略) 打ちのめしてやりたくなる」(エ

リアス, 1996, 128), そうした戦士のエートスが形成されたのである。いわば、イギリスのスポーツ化が「繊細になっていくダイナミクス」であったとすれば、ドイツの体操クラブと学友会は「粗暴になっていくダイナミクス」を体現していたのである (エリアス, 1996, 118)。

2-2 学友会と儀礼決闘の文化

第二帝政期のドイツに関して、上流／下流の階層を個人の職業や階級のみによって判断することは妥当ではない。例えば、「高級官僚や市民のほうが、豊かな商人よりも社会的に断然優位に立っていた」(エリアス, 1996, 52)。むしろ地位の序列のイメージが「現実の力の配分」を示す信頼できる指標であり、そのイメージを現す指標のひとつに団体への所属があった。例えば、軍隊、将校団、学友会への所属である (エリアス, 1996, 57)。なかでも儀礼決闘を掟とする学友会は、「それらの団体に共通の基準が (中略) 将校教育の基準と結びついて、第二帝国時代のまだ統一されていなかったドイツの上流階級の行動様式や感じ方を統一するのに大いに役立った」(エリアス, 1996, 57) といわれている。

学友会は、大学教授、聖職者など高級官僚の職に就くのに必要な人格を形成する準備期間ともみなされていた。国家が分裂し、常に戦争の脅威にさらされていたドイツでは、イギリスのように戦士が文明化されることはなく、「『名誉』ある身分の高い階層の特徴だった戦士の道德通念や私的な決闘の強制が、二十世紀まで重要な役割」(エリアス, 1996, 58) を果たした。エリアスによれば、国家による暴力の独占と産業化が進むにつれて、戦士社会に特徴的な人間関係の形式やエートスなどは多くの国で衰えていったが、ドイツでは長く 20 世紀まで生き続けた。その結果、法律や法廷に訴えず、自らの体を張って名誉を挽回する決闘という貴族の慣習が市民階級の間にも広まったのである。それは国家による暴力の独占への明らかな違反であったが、戦士であり支配者たる貴族が国家の主人であり、自らが定めた規則にし

たがうという意識が存在したために、法の番人である裁判官自身が法を破る特権をもち、国法よりも貴族の道徳基準の方が優先されたのである。

さらに、軍人と同じく、形式にしたがう暴力行為と勇気という基準をもつ「名誉」の概念が重要な役割を演じ、儀礼決闘による傷跡は、学生が支配階級に受け入れられ、高い地位につく可能性を示す所属証明にもなった。肉体的に強く、武器という暴力手段を使える者が最高の名誉を獲得するという戦士の基準が儀礼決闘のかたちで維持されたわけである。エリアスは、こうして不平等を維持し、肉体的強さや進んで戦う覚悟を優者とみなすハビトゥスが形成され、逆に「平和な形の競争や交際の仕方」、「言葉による説得の技術」が過小に評価され、ワイマール期の議会制民主主義の軽視へとつながったと指摘している（エリアス、1996、75）。

決闘や儀礼決闘においては、「外的強制」に選択の余地はない。決闘にせよ儀礼決闘にせよ、それを放棄して敵前逃亡すれば、自らの地位を失うばかりか、自らの人生に意味を与えていたアイデンティティさえ失うことになる。そこには命令と服従のヒエラルキー、社会的儀礼の範囲と厳密さが存在している。こうして自分の良識と神への責任をもって自己決定できる「自己抑制」ではなく、自分の良心を働かせるためには、強力な支配という「外的強制」の支えが必要となるような人格構造ができていった、というのである⁴⁾。

エリアスは、1871年以降の貴族階級と市民階級の著しい接近に応じて、市民的な行動様式や感じ方のなかに、この時期の貴族の基準から生まれた評価や態度が浸透していったという。戦士貴族の行動モデルを市民階級が吸収した結果、それが「ドイツ人の国民性」と呼ばれる「ドイツ特有の行動様式や感じ方の伝統を強く規定」することになったというのである（エリアス、1996、74）。エリアスは、ベルリン大学の教授エーリッヒ・シュミットへの次のような追悼文（1913年）を引用している。

彼は堂々たる風采だったので、女性たちは彼を神のように敬った。

彼は力に溢れ、負けることを知らなかった。人々はみな彼が好きだった（中略）彼に初めて会った人は背広を着た将校と思ったかもしれない。彼の動作はすべてアーリア人らしくキリッとしていた（エリアス、1996, 99）。

エリアスによれば、「背広を着た将校」や「アーリア人らしくキリッとした」態度は、ヴィルヘルム二世が顕示し、それをヒトラーが真似たものであったが、この追悼文を書いた記者には「そういう性質を表す概念」が「貴族階級の将校の人間像」と映っていたのである。

ドイツでは第一次大戦の敗戦を通じて、ドイツ人としての自尊心と国民的プライドは深く傷つき、その自尊心やプライドを満足させるために支配者にしたがう道が選択される。ドイツ国民にとって、自らのアイデンティティを意味喪失の状態から偉大な国家にまで高めることができるのは支配者だけだと思われたのである。エリアスは、「おそらくこういうディレンマのせいで、特に危機でドイツ人によく見られる『服従の快感』が生まれた」（エリアス、1996, 446）と評している。

3 ドイツ第二帝政期におけるフットボールの受容と暴力

3-1 理想主義と自己抑制

ドイツにおけるフットボールの受容は、体操クラブと学友会が粗暴化していた時期のギムナジウムがひとつの舞台になった。例えば、ギムナジウムの古典語教師コッホは、フットボールの制度的な普及に尽力したことで「ドイツ・フットボールの父」と呼ばれている。しかし、彼が試みたフットボールの学校教育への導入は、当時の体操教師たちから多くの批判を浴びた。体操家たちのフットボール批判は、①教養市民の伝統的な道徳観に反する（足を使って蹴ることは卑しい）、②多面的な身体能力の鍛錬を重視していた体操

家の価値観に反する（足と頭だけが肥大）、③体操家のナショナリズムに反する（外国文化の移植）、④派手な服装と賞品の陳列に代表される商業主義、に要約される。

体操クラブに参加していたコッホは、体操教師たちのスポーツ批判に対して、スポーツの導入後も、「ヤーンの体操共同体が生き生きと活動していたときの原則を忠実に守り続けている」（Koch, 1907, 22）と主張している。教養市民であり体操家でもあったコッホは、イギリスのフットボールを教養市民の価値観を包摂した「Fußball^{フースバル}」としてドイツ化し、それを国民文化として普及させようとしたのである。

古典語教師のコッホは、フットボールの歴史にも着目している。コッホの『古代と近代のフットボールの歴史』（Koch, 1895）では、フットボールの起源が古代ギリシアに求められ、中世のイギリスでは近代的なボールが使用されていなかったがゆえに、それを「フットボール」という呼称の誤用とみなし、逆にドイツの子どもたちが一近代イギリスの場合と同様一豚の膀胱のなかに豆粒を入れて遊んでいたとする宮廷叙事詩の存在を根拠に、もし実証資料が残されていたならば、ドイツにフットボールが存在していたことが証明されるはずであると主張されている。

コッホが書いた一まだラグビーに近いルールであったが、ドイツではじめてのフットボールのルールブックといわれる『中級学年のフットボール・クラブのルール』（1875年）では、すべての専門用語がドイツ語で記述されている。コッホにとって、すべての専門用語をドイツ語化することは、フットボールを「本物の国民遊戯」にするために最も重要なことであった（Koch, 1891, 549）。

彼がドイツ語化したFußball^{フースバル}が、サッカーとして普及しはじめると、ゴール^{ゴール}ス、ゴール^{ゴール}ス、デット^{デット}ヨール^{ヨール}「goals」, 「gohles」, 「det Johl」などの多様な言葉が使用されるようになる（Schnell, 1899, 329）。コッホはこの英語とドイツ語、方言と標準語の混交のなかで、それらの専門用語を標準ドイツ語に統一しようと試みている。そ

れは当時のドイツ語浄化運動の一部でもあった。例えば、フランス語源の「Jus」を「Bratensaft」(肉汁)に、「Frikadelle」を「Fleischklößchen」(肉因子)に変換した一般ドイツ言語協会のために、コッホはフースバルの専門用語リストを作成した。そのリストは、文化大臣の要請にしたがって国民自由党員たちによって設立された国民青少年遊戯振興中央委員会(以下「遊戯中央委員会」)の取り組みによって、各スポーツクラブに配布される。コッホは、これによって「私たちの遊戯は(中略)言葉の完全な意味で本物のドイツの遊戯になった」(Koch, 1903, 71)と自負心を隠さなかった。

こうしたコッホの取り組みを、ドイツの社会学者ホップフは、エリアスにならって、「ドイツ的なもの」の「理想化」と表現している。イギリス人やフランス人と比して不明瞭なドイツ人のナショナリティーに加えて、工業化による指導権力としてのイギリスへの順応のもとで、「人々は閉鎖的になり、ドイツ的なものを理想化した」(Hopf, 1998, 55)というのである。

エリアスによれば、「人間一般に妥当するヒューマニズムの道徳的理想」から「国家や国民の理想像を普遍的人類的理想より高く評価するナショナリズム的な価値観」への移行は、18世紀から20世紀のほとんどの欧州諸国の市民階級に見られるものであった(エリアス, 1996, 158)。自国の下層階級よりも、交渉相手である他国の貴族・王族との一体感がより強かった貴族階級とは逆に、市民階級は自国の人々と同じ生活圏に生きており、「つねに『われわれ』と呼ぶことのできる集団への愛情」を担い、「国民」「国家」を守るためには「必要とあれば悪いことをなすうだけの気構え」をもたなければならなかったのである(エリアス, 1996, 170-172, 183-184, 529)。

しかし「理想的な統一への憧れ」を抱き続けたドイツの場合、「ドイツ人の理想やドイツ人の行動基準には、人間の不完全さや弱さは認められないものだった」のであり、「規範への完全な一致に達しなければ満足は得られなかった」(エリアス, 1996, 381)。その完全な理想のもとで、「弱さ」や「不完全さ」が認められないばかりか、「どんな妥協なら受け入れられるか」も

考えられなかった（エリアス、1996、382）。「統一」という「理想」に比べて議会制民主主義の基本である「交渉と妥協」は浅薄で不潔なものに見えたのである（エリアス、1996、382）。それゆえ、イギリスにおけるスポーツの発生時に見られたような、暴力ではなく議論によって争い、敗れば政権を相手に譲り渡すというハビトゥスは育たなかったのである。エリアスによれば、1871年の第二帝政の成立は、そうした理想の発展過程でもあった。「失われた帝国」の復活は、指導的民族になりうるという極端な優越感をドイツ国民にもたらし、ドイツは遅れをとった植民地獲得競争に乗り出すことになったというのである。

だが、一方で、コッホがフットボールの導入に際して、イギリスのスポーツに見られたような暴力の自己抑制を試みていた事実も見逃せない。コッホは、フットボールを「ボールをもち上げない、体の一部位を使うフットボール（サッカー）」と「ボールをもち上げ、体の複数の部位を使うフットボール（ラグビー）」にわけ、後者のラグビーに「激しさ」という優越性を認めていた。例えば、アーノルドがパブリック・スクールの荒れた生徒たちを惹きつけるためにラグビーを利用したように、格闘の要素を含む激しい遊戯の方が当時の生徒たちを魅了しえたからである。

コッホは、もうひとつのラグビーの優越性としてアマチュアリズムの存在をあげている。コッホによれば、特にサッカーにおいてすぐに顕著になったプロ選手の弊害は、報酬と勝利に気を取られ、相手の怪我に配慮する「善なる意志」が見失われてしまったことにあった（Koch, 1895, 37）。そうした弊害に対処し、イギリスのラグビーはプロ化を禁止したのであるが、激しい格闘をともなうラグビーにおいては、いずれの選手も礼儀作法に厳しくしたがわなければならない、相手選手への配慮が求められるがゆえにプロ化に反対しえたのだとコッホは解釈している（Koch, 1895, 38）。

そもそもコッホは、体操が遊戯を排した軍事教練に変わっていたことに不満をもち、学校の活動に体操遊戯を復活させ、そこにフットボールを位置づ

けようとしていたのである。コッホは、フットボールを体操の授業に導入した理由について、次のように主張している。

学友会が学校の監視下におかれたとしても、ときに個人に悪い影響を及ぼす可能性があることは否定できない。しかし、だからといって教育者は、生徒の団結への努力を抑圧することに、自らの義務とその正当性を見出してよいのだろうか。(中略) 教育者は、真に重要な生徒の団結への努力を発揮させ、高貴なものにするように試みなければならないのではないか。制限された範囲であるとはいえ、ドイツの学校教育にもアーノルドのような意味において活動しうる可能性があることは確かである (Koch, 1878, 21-22)。

パブリック・スクールのスポーツ教育に見られた「自治制 (Selfgovernment)」に感銘を受けていたコッホは、生徒たちが熱中するであろうフットボールによって、飲酒や儀礼決闘といった、当時のギムナジウムに蔓延っていた学友会の粗暴な習慣を改めさせようとしたのである。つまり、エリアスがいう「自己抑制」を試みたのである。

コッホの名著『体操、遊戯、スポーツを通しての勇気の教育』においては、知や健康ではなく、徳、意志、自己支配がスポーツ教育の価値として主張されている。体操クラブや学友会において支配的であった厳しい「しつけ (Zucht)」は、「大商業化と大工業化の影響下に我々が直面している文化生活の変化」のなかでは問題を解決しえず、「誰もが繰り返し直面するであろう困難な課題にあっては、彼の欲望を抑制する意志こそが彼自身を助ける。もし彼が意志の力をもっていなければ、彼を助ける教えはない」(Koch, 1900, 76)。つまり、コッホにとって、フットボールのギムナジウムへの導入は、個人の意志を鍛えることによって、他者への服従を是認する封建的精神から脱却し、近代的な自己抑制を体現しうる市民教育を目指すも

のもであったのである。

3-2 教養市民の封建化・貴族化⁵⁾

1912年にドイツ・サッカー連盟の大部分を構成していたのは法律家、医者、教師、ジャーナリスト、大学教授、行政官、将校、建築家、勤め人であった(Stutzke, 1912, 147)。なかでも、その中心となっていたのが技術者や商人として働く勤め人であった。それは、①彼らの職業がイギリスの知識を任意にしえたこと、②伝統的な自己の文化に欠けていたこと、③彼らの40%以上が30歳代の若者であり、その多くが収入を自由に消費しうる独身者であったこと(Hartfiel, 1961, 48)、④余暇意識を発達させ、収入の多くの部分を娯楽や休養のために消費しえたこと(Eisenberg, 1999, 183)、に起因している。

その一方で、伝統的な文化をもたない勤め人は、社会的なステータスに欠けていた。第二帝政期において、勤め人は無条件に市民階級とみなされていたわけではない(Kocka, 1981, 102-104)。それゆえ、職員連盟は、労働者との差異化を社会保障の権利の固定化に求めたが、多くの勤め人たちは余暇活動のなかで独自の特性を強調し、高貴な領域との接触を試みたのである。彼らにとってのスポーツは、身体の技能を競う遊戯であると同時に、服装や表現のシンボルを競う遊戯でもあったのである。

アカデミックな勤め人たちは、自らのステータスを表現するために「Victoria」^{ヴィクトリア}「Amicitia」^{アミシティア}「Fidelitas」^{フィデリタス}という教養あふれるラテン語のクラブ名を好み、カラフルなユニフォームを華やかな勲章で飾り立てた。フットボールの優勝者がチャンピオンではなく「Meister」^{マイスター}と呼ばれたことも、勤め人のprestigeへの熱望と関係していた(Eisenberg, 1999, 187)。勤め人たちは、新設された単科大学の名声が伝統的な学友会の威信よりも低いものとみなされていたため、彼らは学友会の文化にも魅了されていた。ラテン語以外にも、勤め人たちに好まれた「Borussia」^{ボルシア}「Alemannia」^{アレマニア}「Markomannia」^{マルコマニア}

というクラブ名は学友会に好んで使用されていた名前でもあった。勤め人たちは、学友会の儀礼決闘と同じ形式で試合を申し込み、勝者にはアカデミックな卒業証書 (Diplom) を模した賞状 (Diplom) が授与された。試合の遠征時には、学生帽と似た帽子をかぶって正装したのである (Eisenberg, 1999, 186)。

コッホがフットボールの教育的効果に着目した直接的な動機は、学友会の活動から生徒たちを引き離すことにあったが、その理想は実現されなかった。学友会の中核を担っていた上級生たちがフットボールを「男らしくない」活動として拒否したのである。コッホは「上級学年の生徒たちは、ほんの数人を遊戯場でみることができただけである。残念な理由であるが、おそらく彼らのバブでの活動と学友会の活動がさまたげられるからであろう」と嘆いている (Koch, 1895, 93)。

さらにコッホ自身も、フットボールの普及のために、貴族の行動様式へと歩み寄っていく。コッホは、競争を「賀沢な優勝杯」のためではないと公言していたにもかかわらず、ヴィルヘルム一世の誕生日である 3月22日にフットボールの大会を開催するように提案し、1883年のセダン祭での競技会には、ヴィルヘルム一世によって名誉の賞が寄贈され、その授与はプロイセンのアルブレヒト王子へと引き継がれていく。こうした貴族社会との接点を基盤としながら、コッホをはじめとする遊戯中央委員会の理事たちは、思春期の世代 (eranwachsende Generation) を「強力な世代 (kraftige Generation)」へと成長させるように求めたヴィルヘルム二世の言葉 (1890年の帝国教師会議の開会の辞) を遵守すべく、保守的なナショナリズムに傾注していったのである。遊戯中央委員会内に「教育による国防力の促進に関する委員会」が設置され、『教育による防衛力』という冊子が出版されたのは1904年のことである。コッホもその冊子に「思春期の世代」(Koch, 1904, 26)の教育に関する論文を寄せている。

労働者と経済市民という新興の階級に自らの地位を脅かされるなかで、

コッホをはじめとする教養市民たちは、自らが理想として描いていた自己抑制としてのフットボールを貫徹できず、高貴な階級の行動様式に自らを編入させたのである。1910年には、サッカーとして発展したフットボールが「軍事体操に関する布告」にドイツ軍の教育プログラムとして確かな位置づけを獲得する。この時期までにはサッカーの用語のなかに戦争をコノテーションとする言葉も定着している。つまり、コッホが求めた自己抑制の試みは、対外膨張を標榜していたドイツ帝国に自ら進んで献身しようとする「強力な世代」の育成へ、すなわち「自発的服従」(Mosse, 1975, 94; モッセ, 1994, 104)へと帰結したわけである。ヴェーラーは、ドイツ市民階級の政治的な基盤の脆弱性を次のように表現している。

伝統的な指導権は粘り強く保持され、長期にわたって影響を与え続け、1848年の憲法論争とボナパルティズムによって方向感覚を失った市民階級が「封建化」、より正確に言えば、貴族的な行動様式や生活習慣の模倣、あるいは貴族的な価値や目的への適応という意味における「貴族化」に屈するほどに、深く根づいていたのである(中略)他者の生活様式の猿真似は、彼らの「古くからの統治者」であった貴族との関係における「ドイツ中間階級の表現」としての「大仰なへつらいの精神」に由来するものでもあった(Wehler, 1973, 54)。

エリアスによれば、ドイツでは「粗暴になっていくダイナミクス」を改革しようとする努力が19世紀末から繰り返された。例えば1912年の学友会会議では、弊害の改善を求める一連の勧告が出されている。だが、1914年の学友会会議において儀礼決闘委員会が「学友会の抵抗を見れば、いかなる改革案も提案することは不可能である」と報告しているように、「決闘制度という癌」を取り除く試みは無駄であった(エリアス, 1996, 119)。コッホによるフットボールの導入も、そのような試みのひとつだったのである。

おわりに

イギリスのフットボールが暴力の自己抑制を形式化したのに対して、ドイツにおいては、それと同じ自己抑制が標榜されながらも、市民階級の基盤の脆弱性のゆえに、結局は市民階級が貴族戦士の文化に歩み寄り、暴力性を残しながら、「外的抑制」と「自発的服従」を体現する文化が形成された。ヤーンのドイツ体操も、コッホの^{フースバル}Fußballも、自己抑制を貫徹できず、エリアスがいう暴力的なハビトゥスの維持に寄与することになったのである。

最後に、いくつかの研究課題を指摘して本稿の結びにかえたい。第一に、ドイツの身体文化に見られるセクシュアリティの問題である。例えばモッセは、下層階級や貴族階級から自らを差異化させようとしたドイツ市民階級のリスペクタビリティ（市民的価値観）に含まれる「男らしさ」の価値観が、市民階級とナショナリズムを結合させる要因になったことを指摘している（Mosse, 1985）。その経緯は、例えば手淫の害悪を強調するような「セクシュアリティの近代化」とも結びついていた。異常性欲をコントロールする自己統制能力の観念が、男らしい闘争という価値観をもつナショナリズムと合流したのである。例えば、民主化を目指したヤーンのドイツ体操においても女性は徹底的に排除されていたし、体操家の手淫も固く禁じられていた。暴力の排除を貫徹できなかったドイツ体操におけるセクシュアリティの問題も興味深いテーマだろう。

第二に、ワイマール期のサッカーに関する分析がある。ドイツにおけるサッカーは、第一次世界大戦を経て爆発的に普及する。軍事教練として、戦地での息抜きとしてサッカーを経験した帰還兵がドイツ各地にサッカーを広めたのである。その後、サッカーはますます国防競技として重視され、市民階級の貴族化にも貢献する。そうしたなかでワイマール期のサッカーは極めて粗暴なものになっていく。例えば、暴力行為によって退場させられる選手が続出し、7人对7人で試合が続行されたり、観客たちの喧嘩も日常的なも

のであった。しかしその報道は控えめであった。ダニングがフリーガンについて指摘していたように、おそらくは「暴力が当然のハビトゥス」だったからだろう。

第三に、同じ時期にサッカーのメディア化が促進されたことである。例えば雑誌『キッカー』の創刊者でもあり、サッカークラブ「キッカー」の創設者でもあったベンゼマン（もうひとりの「ドイツ・フットボールの父」）の活躍である。すでに狐狩りに「視覚的な楽しみ」という特徴が顕現していたことは本文中で指摘した通りだが、スポーツのメディア化と大衆化の問題は、例えばワイマール期からナチズム期を通じてユダヤ人を自主的に排除していったサッカークラブの受動的公共圏の問題や、映像技術の飛躍的な進歩によって、選手と観客の暴力が徹底的に排除されようとしているかに見える現代のスポーツにまでつながる問題をはらんでいる。それらの探究が私自身の今後の研究課題になることを記して、ひとまずの結びとしておきたい。

【付記】 本研究の成果の一部は、明治大学人文科学研究所総合研究第二種「暴力の表象空間」および科学研究費補助金・基盤研究（C）（研究課題番号20K11399）の助成を受けたものである。

【謝辞】 田島正行先生には、ジンメル読解の手ほどきばかりではなく、明治大学人文科学研究所の共同研究の機会も与えて頂いた。言葉に尽くせないほどの感謝の念を抱いている。この場をお借りして、心からの謝意を添えさせて頂きたい。本当にありがとうございました。

《注》

- 1) 本論文は、文献一覧に示された釜崎の各論文において実証済の内容を、エリアスの暴力論の視点から再構成したものである。
- 2) 狐狩り以前にも、闘鶏、鶏なげ、牛掛け、熊掛けなど多数のブラッド・スポーツがおこなわれていた。それらのブラッド・スポーツは貴族と下層階級が参加する「賭け」として大きな人気を集めたために、大規模な施設が建設されると同時に、厳密で平等なルールが規定され、出版革命によってそのルールが広められたのである。この貴族と下層階級によるブラッド・スポーツが市民階級による狐狩りやフットボールへと変化していく過程には、市民による「貴族の模倣（マルクスが強調）」と「貴族の離反（エンゲルスが強調）」があった（Eisenberg, 1999）。
- 3) 17世紀のイギリスでは、すでに貴族階級から拒否されはじめた決闘の対抗文化としてボクシングが位置づけられていた（Eisenberg, 1999）。
- 4) エリアスは、カントの『実践理性批判』によって哲学的に示された市民階級の道徳規範が、初期の体操クラブや学友会でしか役割を果たさなかったことを指摘している（エリアス, 1996, p.114）。
- 5) 本節の内容の多くの部分は、釜崎の他の論文（釜崎, 2004）ですでに一度論じられたものであるが、ここではエリアスの暴力の視点からコッホの取り組みを再評価している。

文 献

- Eisenberg, C. (1999) „English sports“ und deutsche Bürger. Eine Gesellschaftsgeschichte 1800-1939. Schönigh, Paderborn/München/Wien/Zürich.
- エリアス：波田節夫他訳（1977）文明化の過程・上。法政大学出版会（Elias, N. (1976a [1939]) Über den Prozeß der Zivilisation 1, Suhrkamp）。
- エリアス：波田節夫他訳（1978）文明化の過程・下。法政大学出版会（Elias, N. (1976b [1939]) Über den Prozeß der Zivilisation 2, Suhrkamp）。
- エリアス：大平章訳（1995）スポーツと文明化。法政大学出版（Elias, N./Dunning, E. (1986) Quest for Excitement: sport and leisure in the civilizing process, Blackwell）。
- エリアス：青木隆嘉訳（1996）ドイツ人論。法政大学出版会（Elias, N. (1989) Studien über die Deutschen: Machtkämpfe und Habitusentwicklung im 19. Und 20. Jahrhundert）。
- Hartfiel, G. (1961) Angestellte und Angestelltengewerkschaften in Deutschland. Dunker & Humboldt, Berlin.

- Gimmel, G. (1917) Soziologie der Konkurrenz. In: Neue Deutsche Rundschau. XIV Jahrgang. Berlin.
- Hopf, W. (1998) Wie konnte Fußball ein deutsches Spiel werden? In: Hopf, W. (hrsg.) Fussball. Soziologie und Sozialgeschichte einer populären Sportart. LIT. Münster.
- 釜崎太 (2010) コンラート・コッホの「学校遊戯」論にみるスポーツ教育の可能性 — マルチノ・カタリニウム・ギムナジウムの遊戯運動と自己規律化 —. 体育学研究. 55 (2). 481-498.
- 釜崎太 (2011) ドイツ国民運動の組織者フリードリヒ・ルートヴィヒ・ヤーンの役割遊戯 — 体操家たちの身体に刻まれた記憶 —. 体育・スポーツ哲学研究. 33 (2). 107-121.
- 釜崎太 (2014) ドイツ第二帝政期における Fussball の誕生 — 教養市民コンラート・コッホの理想と現実 —. 明治大学教養論集. 502号. 53-94.
- 釜崎太 (2017) 近代ドイツの身体文化と「規律訓練」権力 — トゥルネンからスポーツへ — 明治大学教養論集. 526号. 25-40.
- 釜崎太 (2019) スポーツにおける競争の社会的意味 — ジンメルの「競争の社会学」に見る両義性 —. 体育・スポーツ哲学研究. 41 (2)号. pp.133-146.
- Koch, K. (1895) Geschichte des Fußballs im Altertum und in der Neuzeit. Gaertner, Berlin.
- Koch, K. (1900) Die Erziehung zum Mute durch Turnen, Spiel und Sport. Die geistige Seite der Leibesübungen. R.Gaertner, Berlin.
- Koch, K. (1901) Das Fußballspiel im Jahre 1900. Jahrbuch für Volks- und Jugendspiel.
- Koch, K. (1903) Deutsche Kunstausdrücke des Fußballspieles. Zeitschrift des Allgemeinen Deutschen Sprachvereins. 18.
- Koch, K. (1904) Jugenderziehung und Wehrpflicht vor hundert Jahren. Schenkendorff. E. v., und Hermann, L. (hrsg.) Wehrkraft durch Erziehung. R. Voigländer Verlag. Leipzig.
- Koch, K. (1907) Die Einrichtung allgemein-verbindlicher Schulspiele in Braunschweig. Jahrbuch für Volks- und Jugendspiele.
- Kocka, J. (1981) Die Angestellten in der deutschen Geschichte 1850-1980. Vom Privatbeamten zum angestellten Arbeitnehmer. Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen.
- Mosse, G.L. (1975) The Nationalization of the Masses. Political Symbolism and Mass Movements in Germany from the Napoleonic Wars through the Third Reich. H.Ferting. New York. (佐藤卓己・佐藤八寿子訳 (1994) 大衆の国民化. ナチズムに至る政治シンボルと大衆化. 柏書房)

- Mosse, G.L. (1985) Nationalism and Sexuality. Respectability and Abnormal Sexuality in Modern Europe. Howard Fertig Inc. (佐藤卓己・佐藤八寿子訳 (1996) ナショナリズムとセクシュアリティ. 市民道徳とナチズム. 柏書房)
- 奥村隆 (2001) エリアス・暴力への問い. 勁草書房.
- Simmel, G. (1903) Soziologie der Konkurrenz. in: Neue Deutsche Rundschau. XIV. Jahrgang. Berlin.
- Stutzke, E. (1912) Die Stellung des Fußballspiels und der Leichtathletik. Arbeiter Turnzeitung. 1.
- Widt, K. (1931) Friedrich Ludwig Jahn und das deutsche Turnen. Rostock.

(かまさき・ふとし 法学部教授)